

自覺に於ける直觀と反省 (承前)

西田幾多郎

四十二

余は前の二節に於て我々に最も直接なる眞實在は絶對自由の意志なることを論じ、且つ此の自由意志は無内容なる形式的意志ではなくして、豊富なる人格的統一なることを論じた。今此立場から、翻つて思惟と經驗との關係とか、精神と物體との關係とかを考へて見ようと思ふ。

我々に最も直接にして具體的なる眞實在といふべき絶對自由の意志はカントの所謂物自體の如きものであつて、我々の思慮分別を容るべきものではない、ディオニシユース、アレオバギタやスコトッス・エリギナなどの神の考の様に、すべての範疇を超越して居る、所謂鼠錢筒に入つて、技既に窮する所、唯翻身一轉して此處に到るべきである。併し意志は爾く知識を超越するといふことは知識と沒交渉といふ意味ではない、知

識は意志の一方面である。意志はその一方面として知識をその中に含むのである。ヘーゲルの語を以て云へば、知識は意志の *Fürsichsein* の状態である。意志は前進 *egressus* なると共に背進 *regressus* であるとするれば、知識は意志の背進の方面を現すものである。認識対象の世界は意志がその姿を鏡面に映じたものである。既に映像であるとするれば、その中に本體を求むるとはできない、此意味に於て物自體は不可知的である。併しこの影を映ずるものも、この影を見て居るものも、意志自身である、意志は己自身の中に己自身の影を映じて見るのである、ペーメの對象なき意志は己自身の中に反射するのである。絶對自由の意志は一方に於ては無限の發展 *creans et non creata* であると共に、一方に於ては無限の反省 *nec creata nec creans* である、如何にしてかゝる矛盾が成立し得るかは、反省する自己と反省せられる自己と同一なる自覺の事實が之を證明して居る、之を疑ふ人あらば疑ふ人は既に此事實を認めて居らねばならぬ。眞に絶對の立場から云へば、一々の意識は行爲であると共に直に反省である、前進は即ち背進である一方にはプラスであると共に一方にはマイナスである、物を離れて影はないが影を離れて物はない、即ち知行即知である。我々の一々の意識は恰も一つの點が無限なる次元の連續に於て考へられ得る如くに無限なる對他の關係

を含んで居る Reflexion in sich なると共に Reflexion in anderes である意識の或一點が限定せられた時、直に又己自身の否定を含んで居る、即ち *Aufheben* の可能を含んで居る。限定せられたる意識の對他の方面が普通の所謂抽象的方面である、此の如き意味に於て或一つの意識の對他の關係が無限と考へられた時、ラッセルが無限の次元は無意識となると云ふ様に、その意識内容は却つてすべての限定を失ふて單なる抽象的概念となるのである。嘗に斯く我々の意識の一一の點が無限なる對他關係を含むと考へねばならぬのみならず、意識の一一の點が生きて居る、即ち無限の活動の如きものでなければならぬ。一一の點を單に無限の潛勢力と見るのは尙之を對象化したものである、直接には一々の點が自由なる主觀でなければならぬ、無限なる對他の關係は是に於て無限なる自由でなければならぬ。無限なる對他の方面を含むといふことは無限の誤謬、無限の罪惡を含むと云ふことになる。眞實在は道德的であると云ふことができる、具體的實在に於ては一一の點が絶對として出發點となることのできるのである。

右に云つた如く、直接の具體的體驗に於ては、其一々の點が無限なる對他の關係を含んで居る許りでなく、其一々の點が自由なる主觀である、即ち自己の中に自己を否

定する力を有するのである。アウグスチヌスは神は最初の人間に自由を與へたと云ふ様に、我々は一々の作用に於て神に接すると共に、惡魔に接するのである。斯く一々の立場に於て自己が自己を否定する作用が所謂抽象作用であつて、即我々の思惟作用である。絶對自由の意志の否定の方面、即 *neq creata nec creans* の方面が我々の反省作用であり、思惟作用であるのである。純粹思惟とは此の如き方向の極限に過ぎない、純粹思惟の對象とは此の如き體驗の内容を指すのである。我々は自己自身を意識する時、即ち自己自身を否定して消極的統一となつた時、我々は思惟主觀となるのである。例へば我々の純粹視覺に於ては線は數學者の所謂幾何學的線でもなければ、心理學者の所謂線の感覺といふ如きものでもない、其各々の點に於て直線と曲線との *Durchdringung* である、色も之と同じく自ら *eine Tendenz nach Weiss und Schwarz* を含んで居る。此の如き純粹視覺の作用は無論それ自身に於て全きものであらうが、我々の全意識は單に視覺だけではない。我々は種々の作用を有し、其一から他に移り行くことができるのであるから、恰も純粹視覺に於て一つの線、一つの色が種々なる連續の *Durchdringung* である様に、純粹視覺其物も單なる純粹視覺ではなくして、種々なる作用の *Durchdringung* であると云はねばならぬ。而して他へ移り行くといふこ

とは、それ自身の中に對他の關係を有するといふことである、即ち自己を他に於て有することである、換言すれば自己自身の中に自己を否定する動機を有することである、反省の可能を含んで居るのである。無論純粹意識の立場に於て此の如き意味に於て一が他を含むといふことは一が他と混合することではない、或一つの立場を明にし之に徹底するといふことは自ら他に移り行くことである、對立を明にするのはその統一を明にする所以であるが、兎に角視覺とか、聽覺とかいふ如き純粹知覺に於ても、之を意識するといふこと自身がそれ自身の否定を意味して居る、換言すれば此等の作用は更に大なる統一に屬して居るのである。此の如き統一の意識が思惟の體驗である、小なる個々の作用に對しては、此立場は外から加へられる反省作用と考へられるが、絶對自由の意志の立場から見れば、個々の立場の成立と共に與へられた約束である。所謂經驗的知識といふのは純粹知覺を此の如き立場から反省して見たものである、我々が此立場から純粹知覺に於ける線とか色とかいふものを反省して見た時、それが知覺の對象として我々の認識の範圍内に入り來ると考へられる、コトエンが「知覺の豫料の公理に當嵌つて始めて認識界に客觀性を得るといふのは此場合を指すのである。認識以前の所興はコトエンのいふ如き *Bewusstheit* ではなく

して、フイドレルの純粹視覺の如きものでなければならぬ。認識の到達することのできない而も認識が之を目的とせなければならぬ對象は、それ自身に動的なる純粹經驗でなければならぬ。コイエンが内包量として我々の認識の世界に客觀性を要求するといふ所のは此の如き純粹經驗の動的方面でなければならぬ。即ち絶對的意志の發展の方面でなければならぬ。ブレンターノのいふ様に、知覺したものを思惟することができ、同一の本質が一方に於て知覺の對象となると共に一方に於て思惟の對象となることができるとすれば、本質とは作用の結合點と考へることができ。而して此の如き本質の發展の方面が直觀として認識の客觀的對象となり、その否定の方面即ち反省の方面が概念的知識となると考へることができ。心理學の所謂知覺とは此兩方面の中間に位するものである。純粹知覺の反省の方面即ちその反省せられた形といふのはその體系と他との接觸面である、即ち他の體系と結合し得る様に改造せられた形である、我々の主觀的意識といふのは此の如き意味に於て種々なる體系の結合の形式に過ぎぬ。意識其物は無内容と考へられ、意識せられるといふことは意識内容に何物をも加へないと考へられるのは此故である、即ち所謂主觀的意識とは意志の絶對的否定の方面である。或は斯く改造せられた

ものは元の純粹知覺ではないと考へられるかも知らぬが、無論概念的知識と純粹知覺とは同一でないことは言ふまでもない、併し赤の純粹知覺が反省せられた時、青の概念となるのではない、本質は同一である、何となれば本質とは一つの作用から他の作用に移る結合點とも考ふべきものであるからである。我々が概念的知識の立場から見て純粹知覺は達することのできない認識以前と考へられるのは、全然その性質を異にする故ではない、前者が後者の中に含まれて居るからである。併しその含まれて居るといふのは、ウンデルバントのいふ如く知識の世界は直接經驗の量的に異なれる部分であるのではなく、三角形の一邊が三角形の中に、三角形が四面體の中に含まれるといふ意味に於て、部分的次元として含まれて居るのである、純粹知覺は絶對意志の形に於て高次的である。無論一方から考へれば、思惟其物が矢張一つの作用であり、一種の純粹經驗であるとも云ひ得るであらう、無限なる反省の極限それ自身が一つの中心を有つた發展とも考へ得るであらう、恰も一つの直線が無限の距離に中心を有つた圓として考へられると一般である、斯くしてすべてが藝術家の所謂純粹知覺と同様の純粹經驗であると云ひ得るであらう。創造する神は同時に創造せない神である、肯定の意志は即ち否定の意志である、之と同様の意味に於て純粹

知覺の半面に於て直にその經驗の思惟が含まれて居ると考へることができ。リッケルトなどの考では、單に反省の方面のみに立つて見るから、思惟と直觀とは兩斷して互に結合することはできぬが、コージェンなどの考方では與へられた直覺の根柢に直に思惟を見るから、一層高次的の立場から知識其物の成立を明にすることができるのである。従つて知識は理念の無限なる發展進行となるのである。

以上述べた如き譯であるから、我々の思惟とは絶對自由の意志の反省の方面である。種々なる經驗の體系を否定して而も之を統一する方面である、即ち種々のアプリオリの統一作用である。種々の經驗内容はそれぞれのアプリオリに屬するから、思惟自身は何等の内容なき形式に過ぎぬと考へられる、恰も我々の意識内容となる線は皆有限であつて、無限の線といふ單に思惟の對象であると考へられるのと一般である。併し眞の無限は單に際限がないといふことではなくして、それ自身に於て獨立といふことでなければならぬ、即ち己自身を反省するといふことでなければならぬ。單なる消極的統一としては、思惟はリッケルトの思惟の如く「甲は甲である」といふの外ないであらうが、絶對意志の反省的方面が反省的意志として獨立性を認められた時、それは一つのアプリオリとして、純粹知覺などと同じく、一つの創造的思惟となる。

此の如き思惟が余の所謂純粹思惟の對象界即ち數理の世界を創造するのである。思惟の統一はずべてのアプリオリの統一であつて對他關係の極限であるから、すべてに共通であり、思惟對象の世界は不變であり、一般的であると考へられるのであるが、思惟といふ如きものも既に一つのアプリオリとしてそれ自身に意識せられた以上は、もはや特殊なることを免かれない、即ち絕對意志の一方面であつて絕對意志其の物ではない。眞に創造的なる絕對意志は單なる否定でないのみならず、又何等の意味に於ても限定せられないものでなければならぬ、無限に貧なると共に無限に富でなければならぬ、眞に絕對意志の統一は肯定と否定との統一、形式と内容との統一、即ち一言で云へば人格的統一でなければならぬ、此處に思惟と經驗との統一があり、此處に知識の客觀性がある。無論此の如き意味の絕對的統一は達すべからざるものではあるが、我々は何處までも之に近づくことができる、而してその性質及び程度に従つて、種々の世界が現れるのである。我々の絕對意志の經驗は二つの方向に向つて發展して行くのである、一つは種々なるアプリオリの統一の方面、即ち反省の方面であつて、一つはアプリオリ自身の發展の方面である。一つは一般化の方面であり、一つは特殊化の方面であつて、此等の二方向の作用は絕對意志の立場からして

は直に一であるが、恰も三次元の世界に於て立體に種々の形のできる如く、その統一に種々の形を見ることができるのである。單なる肯定と見らるべき純粹知覺の如きもの、單なる否定とも考へらるべき、純粹思惟の如きもの及び兩者の間に位する種々の階段ができる。或一つの内容の肯定が藝術の立場であり、その内容の否定が思惟の立場であり、否定の否定即ち絶對的肯定が宗教の立場である、所謂知識の立場は否定から否定の否定に行がずして、翻つて部分的肯定を反省する立場であると云ふことができる。例へば、我々が赤色の經驗を反省して「これは赤である」と云つた時、我々は一つの純粹知覺の立場を超越し之を否定したのである。リッケルトの所與の範疇 *Kategorie der Gegebenheit* と云ふのは此の如き絶對的意志の否定の立場から或一つの純粹知覺の立場を統一する形式をいふのである、即ち知識の最初の階段である。此場合、これは「として主語となるものは絶對意志が肯定から否定に移る回轉の點である、此點を界として知覺の世界から思惟の世界に入るのである、此點は二つの世界の接觸點である、それで現在と考へられるのである。我々の意識は何の點に於ても、反省の可能を含んで居る、すべての點に於て、知識の世界に接して居る、而して此の如き反省の立場がそれ自ら身一つの意志として對象界を創造する時、上に云つた如く

純粹思惟の世界として數の世界ができ、此立場から更に絶對的創造の意志の立場に返る時、即ち人格的統一の立場に向ふ時、カント學派の所謂經驗の世界ができる。時間空間とは純粹思惟に依つて經驗内容を統一する形式に過ぎない、嘗て云つた如く思惟體系の質的方面が空間の基となり、その量的方面が時間の基となるのである。己自身を省る純粹自我の立場から純粹經驗ともいふべき絶對意志の全體を統一して見た時、そこに時間、空間、物と性質、原因と結果などの範疇に依てなる所謂事實の世界が成立するのである。自我それ自身の發展が時間の範疇となり、その發展の方向の差別が空間の範疇となり、此兩方面の統一が物の範疇となる、ポアンカレの法則「*Le principe de la simultanéité*」といふのは法則といふよりも寧ろ物とその性質とか或は物とその作用とかいふ範疇に依つて成立するものと考ふべきであらう。此の如き事實の世界即ち所謂實在界は超個人的自我の統一に依つて成る對象界として、各人に共通なる所與の客觀界と考へられるのであるが、上にも云つた如く思惟が思惟として意識せられる時、既に相對的なる一つのアプリオリであつて、眞の統一でないのであるから、此の如く思惟の統一に依つて成立せる世界は一方から見れば却つて主觀的である、古來哲學者や科學者が此等の現象界の背後に、本質の世界を求めたのは之に依るのである。

此要求は思惟に對して外から與へられるのではなく、實に思惟其物より起るのである。カントが *Analogien der Erfahrung* に於て論じて居る様に、純粹思惟の統一の要求は遂にすべての物を一本體の相互作用として見ることを要求するのである。而して絶對意志の一方面即人格の一部分たる思惟の要求は單なる思惟の統一に止まることはできないで、内容を要求して來なくてはならぬ、即全經驗の統一を要求せねばならぬ、思惟はその根柢たる自己の全體に返ることを要求する、そこに知識の客觀性があるのである。物理學的世界觀は之に依つて出て來るのである、自然科学者の所謂經驗界とは絶對反省の立場に立つて全經驗を統一して見たものである、自然科学者の所謂直覺、例へばポアンカレの感官の證明といふ如きものは此の如き立場から見た直覺である、藝術家の直覺とは元來その範疇を異にしたものである。自然科学的知識の發展とは此の如き意味の統一發展をいふのである、自然科学界に於ける種々なる假説、ポアンカレの原理 *Principes* といふ如きものは斯くして出て來るのである。併し此の如き單に絶對的反省の立場から人格的内容の全經驗を統一するとは固より不可能である、思惟の立場に對して視覺や聽覺のアプリオリは非合理的である。是故に科學の假説は主觀的である、經驗の内容に對しては外からの統一となる、科學

者が經驗界の背後に求めた本質は眞の本質ではなくして、却て我々の主觀的概念となる。眞の經驗内容の統一は種々のアプリアオリの統一たる我々の人格の中に入つて之を求めねばならぬ、即我々の自己の奥に入つて深き内面の自由に求めねばならぬ、否未だ我といふべきものもなき直接の統一に求めねばならぬ。純粹知覺の發展ともいふべき藝術家の意識は此點に於て一層深い具體的意識であると云はねばならぬ、即一層内面的な、自由な、直接な統一である。此意味に於て藝術の立場は思惟の立場に比して一層自由な立場であるといふとができる、向に藝術の立場を肯定と云つたが、嚴密に云へば、藝術の立場は單なる肯定ではない、思惟の立場が單なる否定ではなくしてそれ自身に創造的である如く、形成作用 *Gestaltungstätigkeit* ともいふべき藝術の立場はそれ自身の中に否定の方面を含む具體的立場である。否定を除去して單に肯定的なる抽象的立場は心理學者の所謂知覺の立場の如きものに過ぎない、藝術家の純粹知覺とは之此の如きものではないのである。それで心理的知覺の對象として考へられた色とか音とかいふものは單に現象と見られるかも知らぬが、藝術の立場に於ける此等の知覺は物理的實在よりも一層深い直接な具體的實在である、色や音の自己はエーテルの振動とか空氣の振動とかいふものではなくして、却つて

藝術家の直觀の如きものでなければならぬ。

我々の意識は各々の點に於ては肯定であると共に否定である。藝術の立場も單なる直觀でなく、思惟も一面に於て直觀である。我々の意志の體系は意志の中に意志を許すが故に、その一々の點に於て Reflexion = in = sich なると共に Reflexion = in = Anderes である。ヒルデブランドが「形の問題」の中に於て perceptual form を論じて我々が指だけを見た時、その部分の形と大きさとの印象を得、手の全體を見た時、此指を手全體との關係に於て見る新なる印象を得、手と腕とを見た時には更に又新なる印象を得ると云つて居る如く、純粹知覺に於てもその Reflexion = in = sich は直に Reflexion = in = Anderes である。純粹思惟とは此の如き意味に於て宇宙の純粹知覺ともいふべき絶對意志の否定の方面であり、道德的意志とはその肯定の方面である、此兩方面を統一した絶對意志其物の立場が宗教である。嚴密に同一とは云へぬかも知らぬが、宗教はいはゞ超越的意識の藝術的立場の如きものであり、藝術の立場は之に反し部分的經驗體系に於ける宗教の立場である、藝術的直觀が知覺に比して具體的であると云つたのは之に依るのである、藝術的直觀の世界は認識的純粹自我の統一の世界に比して量的には部分的であるかも知らぬが、質的には具體的全體を現して居るのである。時間、

空間、因果などいふ Wirklichkeitsformen に依つて成る所謂實在界とは絶對的意志の否定的統一との界である、知識に對しては直接に與へられた客觀的實在と見られるかも知らぬが、絶對意志に於てはその抽象的一面に過ぎない、此形式の中に絶對意志全體を入れようとすれば直にアンチノミーに陥るのである。絶對意志が眞に己自身の具體的全體に返るには此の如き實在界を超越して宗教の立場に入らねばならぬ。斯く知識の立場即ち否定の立場から絶對的肯定の立場に移る轉回の點が道德的意志の立場である、マールテルリンクの云ふ如く道德的意志に依つて過去を現在となすことができるといふのは之によるのである。所謂實在界は量的には客觀的であるかも知らぬが質的には主觀的である、藝術の對象界は之に反し量的に主觀的であるかも知らぬが質的に客觀的である、知識の立場を超越して直に絶對意志の内面に接觸すると考へることができるのである。(未完)

此節の終の方に於て述べた宗教、藝術、道德、認識の立場の區別、關係に就ては尙不精確なる所が多い、これは他日評論することとする